

昨今の米不足

～近畿農政局滋賀拠点～

米不足・近年のインバウンド需要などが原因か

8月19日、近頃何かと話題となっている米について調べるため、近畿農政局滋賀県拠点の中川さんと新谷さんを取材した。



近頃騒がれている「米不足」の大きな原因は、「近年のインバウンド需要を考慮できていなかったことも要因のひとつだ」と近畿農政局滋賀県拠点の中川さんは語った。生産量の減少というよりは、需要量の増加が原因だとい

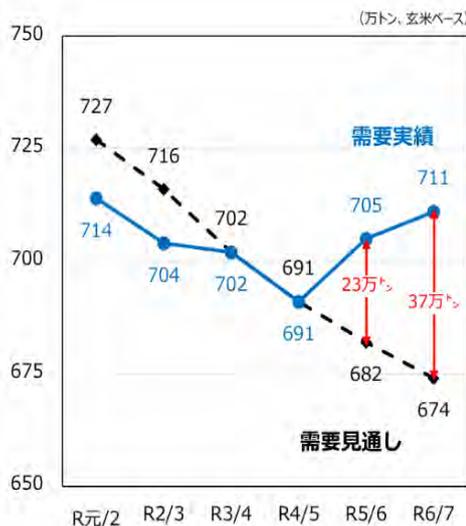
▲近畿農政局滋賀県拠点・中川寿洋さん

37万トンもの差があると見通しと需要実績には、約37万トンもの差があるとされている。この差の要因のひとつは、インバウンド需要で、令和4年度では2・1万トンであったとされているが、令和5年度では5・6万トン、令和6年度では6・3万トンと、次第に増加していると考えてられている。また、家計購入量についても令和6年度は令和5年度に比べ、約11万トン増加したと考えられている。

これらの要因に加え、米の価格が上昇していることに対する消費者の不安や、昨今のふるさと納税の返礼品の販売数量の増加等も一因考えられていると語った。しかし、「実際のところはあくまでも推測に過ぎず、すべての要因を特定するのは難しい」と中川さんは語る。基本的に1年に1回しか収穫できない米の需要量を完璧に調べ上げ、需要と供給のバランスを保つのは至難の業なのだという。

うことだ。

実際、農林水産省のデータ



▲農水省の検証より、需給見通しと需給実績の差

暑さによる米の品質低下が原因に

米不足が話題となり始めた令和5年度と、令和6年度は精米歩留まり(せいまいぶどまり)が悪化したともいわれている。

米は「胚芽」、「ぬか層」、「胚乳」という部分などから構成されており、精米をすると、ぬかの部分等が取り除かれ

【精米歩留りの推移(調査結果)】

年度	精米歩留り		
	大手卸売業者	地方卸売業者	米穀店
2年産	89.7%	89.8%	89.3%
3年産	89.7%	89.5%	89.7%
4年産	89.6%	89.2%	89.5%
5年産	88.6%	88.8%	88.1%
6年産	88.8%	89.4%	88.9%

まりの推移
▶農水省の検証より、精米歩留

るため、実際には玄米の約90パーセントの重量が精米後の重量となり、これを精米歩留まりと呼んでいる。しかし本来90パーセントであるはずの精米歩留まりが令和5年度では88・6パーセント、令和6年度では89・2パーセントと、どちらも90パーセントを割っているのだ。新谷さんは「確かに、減っているのは2パーセントもないが、それが全国レベルとなると、大きな影響だ」と語る。

実際に令和5年度では10万トン、令和6年度では6万トンもの玄米が減少したと考えられている。

この背景には、昨今の暑さが関係していると考えられており、高温障害等によって米にひびが入るなどして、精米時に余分に取除かれる部分が増えてしまうという。

また近年は、カメムシ等の被害も多く確認されておりそのことも米の需給量に大きく影響していると考えられている。

複雑に絡み合った

米の流通実態の把握不足も、価格高騰の一因に



▲近畿農政局滋賀県拠点・新谷博則さん

米不足が始まった当初は、

一部の集荷業者が米を売り
渋りしているという可能性
もあるといった報道もあつ
たが、実際のところは、それ
以外のところに要因がある
そうだ。

実際、JA系統などの集荷
業者への出荷量は前年に比
べ34万トン減少した一方
で、生産者の直接販売や集荷
業者以外の取引等は前年に
比べて49万トン増加した
そうだ。

ニュース等でも、農家から
直接米を購入している人は
増えていると報道されてい

る。

民間在庫の多くがすでに
売り先が決まっておき、緊急
事態への対応が難しくなっ
ているのだ。

その上、民間在庫の減少に
よって、米が不足するのでは
といった不安から競争が生
じているというのだ。そのた
め、卸売業者を中心に米の調
達合戦となり、米価が上がっ
ているとの見方もある。「米
不足」がなかなか解消されな
いのは、需要・供給の關係に
加えて、様々な要因が複雑に
絡み合っているのが原因で
あるという考えが広まって
いる。

「どうしても、すべての米
の流通を把握し需要量と照
らし合わせることは非常に
難しいことではあり、推定が
ベースとなってしまうとい
う」とも新谷さんは語ってお
り、農業の不安定さというの
も要因になっているのだら
う。

筆者の声

今、日本全体が少しパニッ
クになっている部分がある

のではないだろうか。「米が
ない」「輸入米も検討すべき
では？」といった意

見も出始めている。
確かに、日本

では米が不足し
ておりその混乱
により、米の値
段が上がりが、よ
り消費者が米を
手に入れるにく
くなるといった負
のスパイラルが
起こっている。

しかしこのま
までは、さらに
日本人の「米離
れ」は進んでし
まうように思う。

「米が足りな
いから米以外に
頼ろう」という
のはこれからの
日本の農業をさ
らに衰退させて

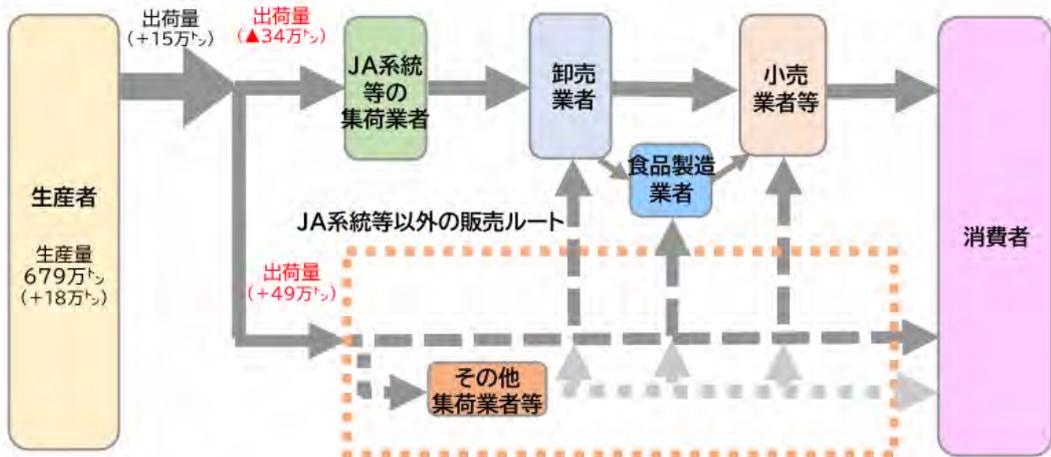
いってしまうだろう。

私たちはいつだって、そう
してきた。米が余れば米の生
産を縮小しようとして、いま
米が不足すると他国に頼ろ
うとする。私たちは根本の原
因からいつも逃げてきた。結
果さえ良ければ良しとして
いつも、問題を先送りにして
きた。その代償を今、払わさ
れているのかもしれない。

私たちは今まで、「米」とい
うものを身近に思っていた
だろう。「米」というものを当
たり前にあるものだと思っ
てどこかで思っていたのでは
ないか。

しかし昨今の「米不足」に
より私たちは、「米のありが
たさ」を思い知ったのではな
いか。ならば、今こそ「米」
のありがたさを思い出し、
「米」を大切にしようと思っ
べきだ。

これを機会に、農業に対し
ての興味を持ち、日本の農業
について真剣に考えてくれ
る人が一人でも増えてほし
いと願うばかりだ。



▲農水省の検証より、米の流通ルートの多様化の状況

滋賀県は米の開発や

栽培方法にもこだわっていた

暑さに強い品種を作る滋賀県

中川さんと新谷さんによると滋賀県は暑さに強い品種の開発にも力を入れているということだった。いただいた資料等をもとに、滋賀県の米について調べてみた。

「滋賀県は暑さに強い品種を作っている」と語る中川さん。「みずかがみ」は滋賀県で開発された米である。昨今の気候変動に対応するため、気候変動下においても優れた品質を保持する品種を作ろうと、

10年前から栽培がスタートした。「きらみずき」という品種も高温に強い品種だそう。夏の高温や長雨、台風による品質低下や、収量低下を防ぐため、滋賀県農業技術振興センター

が令和4年に開発したそ
うだ。

三日月知事自身も環境にやさしい米づくりにこだわっており、この「きらみずき」の栽培方法は「オーガニック栽培」と「化学

▲滋賀県内の水田



肥料や殺虫・殺菌剤(化学合成農薬)不使用栽培に限定しているという。

その甲斐あって、「きらみずき」は栽培者・面積が急増しているようだ。これから「きらみずき」栽培がもっと進めば、より環境にやさしく、おいしいお米をたくさん食べられるため、昨今の「米不足」に終止符を打つことができるかもしれない。

オーガニックを 買う人は少ない

一方で「オーガニックを
実際、オーガニックを

買ってみたいという人は

▲みらいの農業振興課の
保積直史さん



しいが日本はそこまでして5000円のものを買うおうとする人は少ないという。昨今の物価高もひとつの要因になっているのだろう。

オーガニックが環境にやさしく、地球温暖化対策になるということは、ほとんどの人が知っているだろうが、なかなか金額の面で手が出ない人も多い。

「オーガニックをもっと日本で普及させるには私たちの意識を変える必要がある」と保積さんは言う。

オーガニックを「良い」と思っているだけ」「買ってみたいと思っ
大切なのは私たちが自ら行動することなのだ。

オーガニック栽培は農家だけでなく、私たち自身の協力によってはじめて成立するものなのである。

農業を明日へとつなぐ

—私たちがこれからの農業を維持していくための取り組みについて—

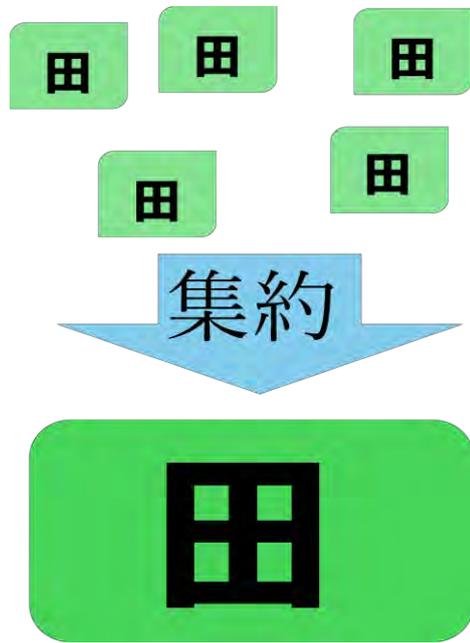
農地はまとめて効率的に

農業は全国的に高齢化が非常に問題になっており、それは滋賀県にも当てはまる。「今は、農家のほとんどが60歳以上である」と新谷さんは語る。

農家が高齢化するだけではなく、若い人もだんだん入ってこなくなっているそうだ。近年は企業の賃上げが進み、物価高も止まらない中、「農業はほとんど所得が上らないので厳しい」と中川さんは、これか

らる農業の未来を心配していた。農業人口が少ない現在、農地の基盤工事を行い大区画にまとめることによって少人数で効率よく農地を活用しようという事業が進んでいる。実際、滋賀県の東近江市は、国営農地再編整備事業として、大規模な基盤整備が行われようとしている。

だが問題もあると語るのは、保積さんだ。琵琶湖周辺の平地にある水田は、広く非常に効率の良い農



▲基盤工事のイメージ

業が実現できているというが、日野町などの中山間地域の水田は、

まだまだ水田の形も不規則で、小さいため効率の良い農業ができていない部分もあるという。

これからは、中山間地域の水田をいかに効率的にできるかが、「米不足解消」の鍵になるかもしれない。

滋賀県では農地の基盤

農業に興味を持ってほしい

▶取材を受ける中川さん(左)と新谷さん(右)



工事以外にも、営農型太陽光発電設備の設置なども行われているそうだが、どうしても農業が抱える問題を解決しきえることはできていない。

「近畿農政局滋賀県拠点、小中学生に農業への興味関心を持ってもらうための活動をしている」と中川さんは語る。

でもらおうとしているそうだが、今の高校生はそのことに気づけていたのだろうか。結局これからの農業を担っていくのは、若い世代であり、どれだけ農業技術が進歩して、効率的な農業ができるようになったとしても、農業に興味を持つ人がいなければ、農業は衰退してしまう。

「人は食べるものがないと生きていけない」と保積さんは語る。確かに、今現在世界で重要視されているのは産業発展だ。だから農業は二の次になつてしまっているのではないか。

「農業に興味を持ってほしい」と中川さん、新谷さん、保積さんは口をそろえて言っていた。これからの農業を発展させることはできなくても最低限、維持することができるようになることを祈るばかりだ。

中川さんや新谷さんが小学生のころは、給食はパンが出てくるのが当たり前だったそうだが、今のようにご飯を給食で提供する回数を増やすことで、「米」を食べる習慣をつけてもらおうとしているという。また田植え体験や食育などに力を入れることで、何とか農業に興味を持つ

農家に不可欠なJAレーク滋賀

農家と買い手をつなぐ

8月26日、近年の米作りについて調べるため、JAレーク滋賀の営農本部にて取材を行った。

「農協は組合員の農業経営と生活を豊かにするためにある」と語るのは営農本部(営農戦略課)の村瀬雅喜さんだ。

村瀬さんによると同じ目的を持った農業者を中心とした個人や事業者の集まりで、お互いに助け合う組織だという。

だからこそ、企業のように利潤を追い求めることばかりないそうだ。

営農戦略課としては毎年、気候変動などによる栽培管理の課題を洗い出し、それを元に農家の方に指導をしていくそうだ。しかし、「農業指導をするこ

とに対してはお金をもらっていない」と村瀬さんは言う。

その代わりに、米の販売時や、肥料、農薬などを農家の方に買ってもらうときには手数料をもらっているそうだ。

農家の中には農作物を作ることで精一杯になり、販売先と商談するまでは手が回らない農家もいるそうだ。「そういった方にとって、農協が代わりに販売することは重要」だと村瀬さんは語る。これは、企業とはまた違う性質を持つ農協だからこそできることなのだという。

また近年は、一人ひとりの農家の規模が大きくなっていく傾向があるそうだ。そのような中で、「中小農家(兼業農家)は労働力の多様化や収入安定化を目指し、大規模農家は規模のメリットを活かして生産性の向上により、地域農業の活性化を図ることが大切である」と村瀬さんは語る。こうした思いこそが、日本の農地をこれまで守ってきたと言ってもいいかもしれない。

滋賀県の農協に集まる米は約4割!

滋賀県の大津市を含むレーク滋賀の6つの市のみに限ると、「米の4割も農協のもとに集まっている」と村瀬さんは語る。ほかの都道府県ではもっと集まっているところもあるというが、滋賀県では4割にも満たないそう

だ。農協の組合員には農家ではなく、消費者側の人もいるそうで、農家だけでなく消費者のことも考えた行動も心掛けていくそうだが、全ての米のことを管理できているわけでもないらしい。

農家が自ら売っていることも多いそうだ。しかしその中でも、自分の米をすべて捌ききることができない人は少ないらしく、一部の米をJAに卸してほかは自分のところで独自に売る人も多くなっているという。

米不足が話題になったときはJAが悪いという声も一部聞こえてきた部分もあるが、JAという組織がどんな組織かをしっかり理解したうえで発言した人は、どれくらいいただろうか。問題を誰かの責任にして根本解決をしないままでは、この米不足は解消しないままだろう。



▲営農戦略課・課長の村瀬雅喜さん

今の米の価格は**適正**か**高すぎる**のか

生産コストに見合った米の価格設定を

「米の適正価格はしつかりと考えていかないといけない」と語る村瀬さん。米は今までの価格が安すぎたのかもしれない。もちろんだが、米を生産コストと同じ価格で売って

いては農家の経営が立ち行かない。生産費用に、利益を足さなければならぬのだ。

近年、生産費用の上昇に伴い、「販売価格を設定するべきではないか」と村瀬さんは語る。そして、「販売価格の目安として適正価格を国が示すべきだ」と語っていた。また、規模の経済と同じように、「農家の規模により米1kg当りの生産費用が異なるため、中小農家(兼業農家)が継続して農業経営出来る価格設定にするべ

きではないか」と村瀬さんは語っていた。また米作りをするには、トラクター、田植え機、コンバインが最低限必要で、こうした農業機械の価格も上がっているという。

価格は市場が決めるものだが、そうした状況も考慮した適正価格を我々消費者がこれから受け入

▲農機具の価格(村瀬さんより)7年ほどで買い替えが必要に

	トラクター 1000万円~2000万円
	田植え機 300万円~500万円
	コンバイン 1000万~2000万円

れようとすると心構えも必要だろう。

15 haの農地が必須

「米農家1人が生計を立てるには15ヘクタールほどの農地が必要だ」と特に、機械にかかる費用は全体の7~9割を占めるといい、1人で経営する場合は、15ヘクタールというのが

損益の目安になってくるそうだ。1ヘクタールが10000㎡であるから、これは膳所高校の第一グラウンド約15個分に相当する。

しかし、滋賀県の水田の総面積が約47400ヘクタールであることを考慮すると、そこまで大きいわ



けではないように思える。だが、中山間地域は水田がいびつな形をしていたり、そもそも農地面積が少なかったりと、15ヘクタールの農地を確保する難しさは地域によって異なるのだ。

海外に目を向けてみると、農業を専門に行っている大企業の存在が目立つ。しかし、村瀬さんによ

▲膳所高校の第一グラウンド

れば、日本で「企業が農業に手を付けるといことはいいいことばかりではない」というのも、農地は一度放棄されるともう一度農作物を作る状態にまで戻すのに、多くの時間がかかるそう。企業は利潤を追い求める組織であり、農業に伸びしろがないと判断すると農業から撤退してしまう可能性もある。村瀬さんはそうならば危機に瀕することになる農地も増えるだろうと警鐘を鳴らしている。

農業はゲーム機などとは違い、なかなか私たちの目に見えるような進化をしにくい。だからこそ、私たちは「農業」と「産業」というものをしっかりと分けて考えて、「農業」の価値に気づく必要があるだろう。それこそが、消費者である私たちの農家に対する感謝も伝えることに繋がるのだ。

きっかけとなり農家に

昨今の米不足と滋賀県のブランド米である「きらみずき」について農家の声を直接聞くために株式会社「田楽」の佐々木健二さんに取材を行った。

目指していた コースがなくなる

滋賀県で大規模な農業を営む「田楽」の佐々木さんは滋賀県甲賀市出身だ。テリア、建築のことに興

実家はお寺という佐々木さんは、自分の将来についてぼんやりと「寺を継ぐのかな」と思ったこともあったそうだ。もともと、家具やイン

▲農家になった経緯を語る田楽・佐々木さん



味があったという佐々木さんは、専門学校に進学したそうだ。その専門学校では、1回生の時にデザイン全般に関することを勉強し、2回生から専門的なことを勉強することになっていったそうだ。しかし、佐々木さんが2回生のとき家具デザインの分野がなくなってしまい、途中で専門学校は中退したそうだ。その後は、18歳のころから始めたゴルフ場でのアルバイトを、正社員にならなかつたものの続けながら将来のことを考えていたそうだ。

コロナ禍がきっかけ 農業に興味

佐々木さんが田楽に就職したのは2021年の4月だ。2020年の1月からは、新型コロナウイルスが世界各地で猛威を振るっていた。

その中で佐々木さんは「常識というものは本当にもろい」と気づいたという。その中で、「生活の基礎は衣食住の食の部分に興味を持った」そうだ。就農したいと考えていた佐々木さんは、社長との面接を経て農家として働くことを決めたという。

▲広大な水田と佐々木さん



「田楽」には従業員が7人いるといい、そのうち20代が1人、30代が4人ほどいるという。その中には「あぐりナビ」という農業の求人の特化した求人サイトの中から「田楽」の求人を見て応募した人もいるという。「米作りは決して楽な仕事ではない」と佐々木さんは語る。それでも頑張れるのは、農業に対する誰にも負けない強い思いを持っているからだそう。そして、「コロナウイルスの世界的なパンデミック」というきっかけを、自分事として考えることができたからなのではないか。

—異色の経歴—

コロナのパンデミックが

向上心の源は 農業の楽しさ

佐々木さんはとても勉強熱心で、日々農業の勉強

強に励んでいる。佐々木さんは米農家を始めるまで農業に特段詳しくなかったのも小学校のアサガオぐらいらしい。しかし、農業の勉強をすることで、

◀ 「きらみずき」の水田と佐々木さん



少しずつ分かることも増えてきたそうだ。

佐々木さんが勉強して

いる、農業技術検定では、米作りのことだけでなく酪農や土木のことも問われる試験で、会社の中で取得が推奨されているわけでもない。そんな中でも、佐々木さんは自主的に勉強しているのだ。

米作りは一般的な企業と違って、勉強したからと言って昇進があるわけでもない。そんな中でも佐々木さんが頑張れるのは、「楽しい」という気持ち強いからだそうだ。

また、農業というのは肉体労働である。しかし、将来への心配よりも、「あと30回くらいしか米作りができないと考えるとそこへの悲しさが大きいのだ」と佐々木さんは語る。

そのため、佐々木さんは、肉体的にも、環境面においても「これからも農業を続けられるようにする

ことが、これからの農業の課題だ」と語っていた。

人生のきっかけを 大切に

コロナのパンデミックが人生の転機になった佐々木さんは、高校生に「人生のきっかけを大切にしてほしい」と語っていた。農業は理系のイメ



▲水田の手入れをする佐々木さん

ージがあるが、佐々木さんは文系で、且つ米作りのことを何も知らないゼロからのスタートだった。それでも何かを好きな気持ちだが、何かのきっかけで生まれ、それが人生を変えることもあることを知ると、改めて人生の面白さを感じられるかもしれない。

また、好きなことに挑戦しようとする事ができる佐々木さんの行動力も見習う必要があるだろう。高校3年間は進路や文理選択など人生を大きく左右する出来事が多いせいか、自然と悩みが多くなる時期でもある。

そんな時こそ、「雨降って地固まる」ということわざが示すように、ピンチの時こそチャンスと捉え、身の回りの些細な出来事を自分事として考えると、何か見えてくるものがあるのだろう。

田植えのタイミングが課題

農機具は7年以上使用している



◀「田楽」巨大なコンバインと佐々木さん

「ここ2、3年は猛暑のせいで収量が落ちてい
る」そうだ。米は8月の中
旬に自家受粉を行うが、
そのころに気温が35℃
以上あると、そもそも、米
が実をつけないことがあ
るらしい。

そのため、佐々木さん
は「8月の中旬には最高
気温でも34℃ぐらいで、
おさまってほしい」
そうだ。夏は40℃あるの
が普通になりつつある、
この日本で米の収量を今
まで通り維持していくの

は、難しくなってきた
のだろうか。

田植えを早めるのも 遅らせるのも難しい

ここまでの話から、田
植えを早めたり、遅らせ
たりすることも選択の1
つとして考えることもで
きそうだが、そううまく
はできないらしい。

水田の水は4月下旬く
らいから流れ出すそうだ
が、「その時から植えてし
まうと、寒すぎて苗が傷

んでしまう」らしい。

また、田植えを遅らせ
る実証実験を行っている
ところもあるそうだが、
水田の水は他の農家と共
同で使っているため、そ
の兼ね合いも難しいそう
だ。その上、水自体も9月
の中旬で止まってしま
うためなかなか田植えを遅
らせることもできないそ
うだ。

様々な要素が複雑に絡
み合っており、なかなか
米作りの仕方を大幅に変
えることも難しいのが現
状だといえる。

農機具は7年以上

使っている

農協ではコンバインな
どの農機具の耐用年数は
7年だという話を聞いた
が、実際は7年以上使っ
ているらしい。佐々木さ
んは「農機具はボロボロ
になるまで使っている」
と語る。7年という数字

◀収穫間近の「きらみずき」の稲穂



なるそうだ。

もし1年に1
000万円の経
費を計上してし
まうと、米の売
り上げと相殺さ
れてその年の売
り上げがゼロに
なってしまう、
税金がかからな
くなるため、こ
のような手順に
なっているそう
だ。

「農機具の数
は足りているが
水田が315枚
あるため、草刈
りと水管理が大
変だ」と佐々木さんは語
る。「どちらかというと細
かい作業のほうが大変」
だそうだ。

税法上の耐用年数と実
際の耐用年数の違いも考
慮しながら、今後も米問
題について、議論してい
く必要があるだろう。

は税法上の耐用年数であ
り、例えば1000万円
の機械を導入すると、そ
の年の経費に1000万
円を計上するのではなく、
7年間使えると仮定して
1000万円の経費を7
年で割るそうだ。
また実際は7年以上使
用できるので、7年以降
は経費として計上しなく

農家から見た適正価格は3500円

農家から見た米の適正価格はいくらなのかを佐々木さんに取材してみた。

輸入米への危機感

JALEEK滋賀への取材で「農家は備蓄米の放出より輸入米の流入に対して危機感を持っていることが判明した。これに対して、「田楽」の佐々木さんは、「消費者の選択肢が広がるという点におい

▲農機具の種類と役割について説明する佐々木さん



ては、そうあるべきだと思う」と語った。また佐々木さん自身も、「農業を始めて、日本の農業と世界の農業の差を大きく感じた」そうだ。

海外では、広大な農地で大規模な農業を行う。そのため、「時間単価で考えたときに、海外の方が圧倒的に安く生産できる輸入米に対して危機感を抱いている」部分もあるそうだ。

その一方で、日本の米に自信も持っているようだ。日本で作った米は「日

本という自然豊かなところで育てられ、使用されている農薬なども安全性が担保される」という。そういう部分で、輸入米に対抗できる米を作っていききたいそうだ。

米価2500円は安すぎた

「今の米の値段は高く感じる」と佐々木さんは語る。現在は、米5kgあたり4000円前後が相場だ。

米の値段が上昇しても、そのすべてが農家の収入になるわけではない。そのため、小売価格は農家の収入に直結しない。

しかし、佐々木さんは、「以前の2500円という価格は安いと思っており、3500円ぐらいが妥当だと考えているそうだ。

筆者の声

これまで、農協や農政局でも話題になっていた「米の適正価格」について今、私が感じていることを書こうと思う。ここまで見てきたように、米の適正価格は5kg3000

0円代であるといった声は多いように感じた。ただ誰を基準とするかによって適正価格は変わっていったしまうものなのでうまく適正価格を決められないのだろう。

「適正価格はあるのか」と言われればないのかもしれない。市場価格が必ずしも全員にとってベストなものになるわけでもないだろう。



▲「田楽」で使用されているトラクター

だからこそ、自分の主観だけで物事も見るのではなく、客観視することが解決の第一歩なのだろうと私は思う。そのためには多角的に情報を組み合わせ、且つ自分の主観を主観であると認識すべきなのだと思う。

農業は化学

冬(12月ごろ)

農家の1年(きららみずき)

- ・ 土壌改良資材を撒き、耕運する。
- ↓ そのほかにも、耕すために一度水田を乾かすこともする。
- ↓ 肥料には鶏糞や商品にならない豆であるくず豆100kg撒く。
- ・ 種もみの購入
- ↓ J Aから3月ごろに注文し、4月ごろに冷蔵庫にて保管する。
- ・ 温湯消毒(おんとうしようどく)
- ↓ 消毒のため、60度ほどのお湯に10分間つける。

春(4月ごろ)

- ・ 催芽(さいが)
- ↓ 温度や水分などを調節することによって芽を出させる作業。
- ・ ハウスで育苗
- ↓ 催芽させた苗を20日ほど育苗させる。
- ・ 田植え
- ↓ 5月の10日〜20日の間に行く。この時に側条施肥と呼ばれる方法で肥料をやる。

- ・ 除草剤処理

この時は、除草剤が流れ出ないように7日間水田に入ってくる水をせき止める。

米作りは繊細

「米作りは繊細だ」と語る「田楽」の佐々木さん上の表は「きらみずき」の育て方を示したものだ。

大規模米農家の「田楽」の1年は苗を作ることから始まる。ハウスで育苗する前に2、3日30度の部屋に入れるという。ここでの温度が高すぎると病気が発生し、低すぎると芽が伸びにくいそうだ。

また、出穂の時期は過去

・中干し
 莖の本数から判断し、水田の水を土の中の一度抜く。そうすることで、土の中のメタンガスを抜くことができ、土の中に酸素が行き渡る。

夏(4月ごろ)

- ・カメムシ防除
 ↓カメムシ被害を防ぐため、草刈りをする。
- ・間断灌漑(かんだんかんがい)
 ↓水を流しっぱなしにするのではなく、一度水を入れ、水がなくなったら、もう一度水を入れるというのを繰り返す。

秋(9月ごろ)

↓穂が出ることを出穂といい、その3週間前後は必ず水を水田に張っておかないといけない。

・稲刈りの1週間ほど前

↓コンバインが入りやすいように水田の水を抜く。

・稲刈り

↓9月の末に行なう。

・乾燥機で乾燥

↓細菌の発生を防ぐため、すぐに乾燥させる。

・JAで穀物検査

↓等級などを判断される。

食卓へ

のテータとを考慮していつ頃かどうかを予想しているそうだ。

そのうえ、米作りは1年に1度しか行えないので、毎年が挑戦の繰り返しである。失敗するとその1年を棒に振ることになってしま

また私たちは、農業は進化しているように感じているだろう。しかし、それは完全なものではない。今回、取材を行った「田楽」ではまだドローンの導入などは行われておらず、120haもの広大な農地に人の手で肥料をやっているというのだ。農業のIT化が騒がれているが、まだまだ実現には程遠いのが現状だ。